令和6年 1月1日（毎月1日発行）　赤十字新聞　第1004号　昭和24年9月30日　第三種郵便物認可

赤十字NEWS 1

JANUARY.2024.#1004

Japanese Red Cross Society NEWS

1月は「はたちの献血」キャンペーン

10年前

10年前に比べて
10～30代の献血人数が

約31%減っています

>> 将来血液が足りなくなる恐れがあります。

現在

特集 ▶P. 2

ファッションを通して
伝えたい献血への思い

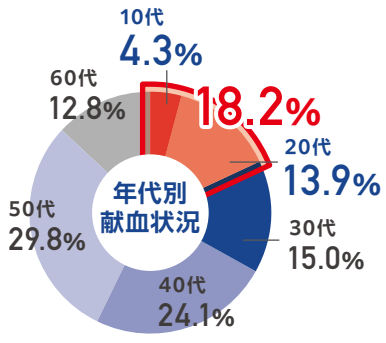
けんけつちゃん

けんけつちゃん、パリコレ*デビュー！

＊2024年春夏パリコレクション（パリ・ファッションウィーク）

18.2%

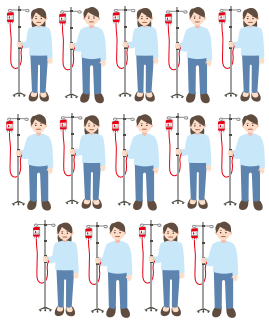
とくに10代・20代（16～29歳）の献血者数は全体の18.2%。より多くの若年層の協力が必要です。



※%は、小数点以下第２位を四捨五入

14000 people

1日あたり約1万4000人が献血に協力しています。



※いずれも令和4年度血液事業年度報より

CONTENTS

TOPICS

＜新年のご挨拶＞
力を合わせ、一歩踏み出す
2024年、日本赤十字社の新たな展望

青少年赤十字（JRC）の国際交流集会、5年ぶり開催
国を越えて未来を築く、仲間づくり …… P. 4-5

連載

国内災害救護 まるわかり辞典 …… P. 4
献血ハートフルストーリー …… P. 5

AREA NEWS

［全国］ 皇后陛下から手拭いの御下賜
日赤の6施設に計600本

［埼玉］ 教育評論家・尾木ママの講演も
奉仕団の創設75周年記念大会を開催

［千葉］ 日本AED財団とコラボ
「AED1000台登録するまで帰れません!?」
YouTubeライブに出演
／他 …… P. 6-7

WORLD NEWS

イスラエル・ガザ人道危機 国際人道法と「命の重さ」
…… P. 8

Present!!

佐藤養助商店
『紙化粧箱入り 稲庭干温飩
つゆ詰合せ(5人前)』

プレゼント！
3名様
詳しくは
P.7をCheck! ▶

日本赤十字社
Japanese Red Cross Society

人間を救うのは、人間だ。

赤十字新聞　編集・発行／日本赤十字社 広報室　〒 105-8521 東京都港区芝大門 1-1-3　TEL：03-3438-1311　一部 20円　赤十字新聞の購読料は会費に含まれています。

SPECIAL FEATURE

特集 ファッションを通して伝えたい献血への思い

けんけつちゃん、パリコレ*デビュー！

2023年9月25日～10月3日にフランス・パリで開催された「2024年春夏パリコレクション」に日本から参加したファッションデザイナー・市川 マーカス知利さん。クライマックスのランウェイで彼の腕に抱かれていたのは、献血推進キャラクター「けんけつちゃん（チッチ）」でした。市川さんにその経緯と、献血に対する思いを伺いました。

*2024年春夏パリコレクション（パリ・ファッションウィーク） ※「けんけつちゃん」は厚生労働省の献血推進キャラクターです

Blood donation moment

（左）「針の痛みは何度やっても慣れないけれど、誰かの力になるのなら」と市川さん（中）この日は「血小板成分献血」のために来所。採取された血液は翌々日の午前中には輸血に使われる（右）「少しでも献血の推進に力になれたら」と、新宿東口献血ルームのスタッフとミーティングをする市川さん

ショーの最後に「けんけつちゃん」を抱いて登場する市川さん。ショーを見た観客から人形と登場した理由を聞かれ、市川さんはけんけつちゃんの紹介と「紛争で多くの血が流れている。しかし紛争のない場所でも、血液を必要としている人たちがたくさんいる」と説明。観客からは「私も今から献血に行く」という反応が

今でも目に焼きついている、母が闘病する姿「病気に打ち克つには？」と考える中で知った献血の存在

「パリコレで『けんけつちゃん』を抱いてランウェイを歩きたい」。東京・新宿東口献血ルームにそんな相談の電話が入ったのは、昨年の9月。電話の主は、ファッションデザイナーの市川 マーカス知利さんでした。

「新宿の献血ルームには、約1年前の12月から通い始めました。今回、パリコレへの参加が決まって、僕が自分のコレクションのテーマに掲げたのが“ミッション”。『本当の血液の使い方を訴えかける』という、僕なりのミッションをデザインにこめました。今、紛争によって多くの血が流れているけれど、**血液は、争いで流すのではなく、人を救うために使ってほしい**と、訴えたかった。そのため、ミリタリーな要素を取り入れつつ、多様な色と素材を使ったデザインに。しかし、色使いやデザインだけでは伝えきれないと考えていたときに、献血ルームで目にした『けんけつちゃん』がふと頭に浮かびました」

パリへの出発も迫る中、けんけつちゃんの権利を持っている厚生労働省へ市川さん自身が直談判し、けんけつちゃん人形の貸出許可を得ました。こうして新宿東口献血ルームの人形は無事に市川さんと渡仏。市川さんがそこまで献血啓発に情熱を抱くのには、乳がんで亡くなったお母様への思いがあります。

「母が旅立ったのは、僕が小学校1年生のときでした。幼いながらも、闘病する母の姿はよく覚えています。杖をつきながら幼稚園のお迎えに来てくれたこと、入院してからは治療で髪の毛が抜け落ち、嘔吐する姿、最後の方は言葉を発することさえ困難な状態でした。病気に苦しむ母が記憶に焼き付いて、がんは恐ろしい病気だという恐怖感をずっと抱いて生きてきました」。幼心に「どうしたらがんがなくなるのか？」「病気に打ち克つにはどうしたらいいのか？」と考えていたという市川さん。一方で、中学生になって携帯を持つようになってから、「献血」の存在を知ったのだと言います。

「そのときは、育ての親である祖母に『まだ献血ができる年齢ではない』と止められました。高校生になり献血ルームに行くと、年齢を証明するものを持っていなかったので親への確認が必要と言われ、『簡単にできるものじゃないんだな…』と。また、実の親ががんだったことから、自分の血が人に提供できるものなのかという大きな不安も常に抱いていて、それがストッパーになったのも事実です」

そんな不安感を払拭してくれたのが、フランス留学から帰国後、デザイナーとして採用された会社で受けた健康診断だと言います。

「母をがんで亡くしていることもあって、『自分にも大きな病気が見つかったらどうしよう』とすごく怖かったのを覚えています。結果が出るまで毎日ドキドキしていました。でも、いざ結果が出たらすごく健康体で『自分の血液を提供することができる！』と、長年の不安や恐怖から解放されました。献血についても自分なりに調べて、がんの治療に使われることもあると知ってからは、『これはやらない手はない！』と」

血液は繰り返し造られる。僕にとってそれは、誰かに提供するためだ、と…

今では、コンスタントに献血ルームに足を運び、献血後には次に可能な最短の日程で次の予約を入れる日々だと言います。

「できるだけ間を空けずに続けていきたいと思っています。母の闘病をそばで見ていた経験があるのに、病気で苦しんでいる人たちに貢献できることをしないのは罪だとさえ感じているからです。自分の好きなファッションの世界で仕事をさせてもらえて、夢であるパリコレの舞台に立つことができた今は、仕事がすごく楽しい。だからこそ、病気と闘っている人たちにも好きなことができる喜びを得てほしい。僕が献血することで誰か一人でも苦しみから抜け出せるのなら、母の死も無駄にならないと感じています」

会社の同僚や友人に、「一緒に献血に行こう」と声を掛けることもあるそう。

「僕が呼びかけることで献血をする人が増えたらと願っています。血液があれば治せる病気があるということを、若い世代にもっと知ってほしい。若く健康な人たちは、飲んで遊んで、自由に日々を楽しめばいい。けれども、それができない人たちもいる。それを知っているのに行動に移せないのは『ちょっと冷たいな…』とも思ってしまいます。顔も知らない誰かでも、みんなが笑顔になれた方が絶対にいいでしょう。それに、血液は少し失っても元の量に復活するもの。再生できない臓器や体の一部を取られるのとは訳が違います。僕は『血液が繰り返し造られるのは、他の人に提供できるように、ってことなのでは？』とすら思っているんです」

家族の闘病を機に生まれた献血への強い信念が、言葉の端々に感じられる市川さん。「この先も、献血を広めるために自分にできることがあるなら何でもやっていきたい」と語ります。彼の生み出すファッションが世界に羽ばたいたように、献血の輪が、この先もどんどん広がっていくことを願ってやみません。

パリから献血ルームに帰ってきました！

新宿東口献血ルームでは、パリから戻った「けんけつちゃん」を展示。身に着けているリボンと靴下は市川さんの特製です（パリコレ出品衣装の素材を使用）

ファッションデザイナー
市川 マーカス知利 さん

Profile

いちかわ・マーカス・かずとし ● 東京都出身。織田ファッション専門学校卒業後、1年間フランス・パリに留学。帰国後自身のブランド「JUSMA（ジャスマ）」を立ち上げ、衣装デザインを中心に手がける。昨年9月に念願のパリコレデビュー。献血へのメッセージが込められたコレクションが話題に。

（左）コレクションでは、裏地や差し色で「血液」を連想させる赤を取り入れ、軍服に使われるカーキやベージュを意識的に使うことで、血液の必要性と平和へのメッセージを届けた（右）アトリエにて。スタッフは学生のころから市川さんの才能を認め、慕ってきたメンバーばかり。「けんけつちゃん」とのランウェイにも賛同してくれた

新宿東口献血ルーム 辻岡 聖子 さん

Staff Voice

患者さんの命を救うために、たくさんの血液を必要としています

昨年の12月に開所2周年を迎えた新宿東口献血ルーム。推進係長の辻岡聖子さんは、市川さんとの出会いをこう振り返ります。「コロナ禍から次第に日常が戻ってきている中でも、献血者数は回復していません。どうにか一人でも多くの人に関心を向けてもらうために日々呼びかけをしている中で、今回のパリコレの話題が一石を投じてくれました。『決して自分のブランドの売名行為とは思われたくない』という純粋な市川さんの熱意もありがたく、キャンペーンにも協力していただけて感謝しきれません」。辻岡さん自身、家族が大動脈解離で緊急手術を受けた際に献血に救われた経験が。その感謝を胸に、“命を救うための献血”の大切さを実感しながら、日々仕事に向き合います。

Cam paign

つなげ、はたちの「ち」から。『はたちの献血』キャンペーン

今年のキャンペーンに登場するのは、若い世代が自分を投影できる等身大のモデルたち。身近な友達が献血をしている、そのことで若年層が献血の必要性をリアルに感じられるような動画を発信します。また1月8日から2月29日まで献血に協力するラブラッド*会員、先着2万人に、人気のイラストレーターが作画したステッカー（4種類）を配布。詳しくは特設サイトをご覧ください！

キャンペーン期間 2024年1月1日（月）～2月29日（木） 特設サイト https://www.jrc.or.jp/lp/hatachi2024/

*献血記録の確認、献血の予約がWebで可能となる会員サービスです

TOPICS

新年のご挨拶

力を合わせ、一歩踏み出す
2024年、日本赤十字社の新たな展望

あけましておめでとうございます。年頭に当たり、皆さまにとって今年が良い年となりますことをお祈り致します。また日頃より日本赤十字社に賜っております温かいご協力とご支援に厚く御礼申し上げます。

旧年中世界はウクライナ人道危機の終息が見えない中で、10月には中東においてイスラエル・ガザの大規模な武力紛争も発生しました。また2月にトルコ・シリア、9月にはモロッコでの大規模地震、さらにハワイ・マウイ島での山火事、北アフリカ・リビアの洪水など、自然災害も多発しました。まさに赤十字ネットワークの底力の試される1年であり、いずれの人道危機についても国際赤十字が現地に根差した支援を展開し、日赤もそのサポートに尽力しました。この中で日赤の行った海外救援金の募集では全国の皆さまから多くのご寄付をいただき、現地の支援に役立てられています。

日赤はこうした人道支援とともに、赤十字国際委員会や国際赤十字・赤新月社連盟、そして世界各国の赤十字社・赤新月社と連携し、国際人道法とその根底に流れる理念の重要性を国内外に発信しています。昨年5月にはG7広島サミットに寄せて、赤十字国際委員会総裁と日本赤十字社社長の連名で核兵器廃絶のメッセージを発しました。また赤十字国際会議で採択された「人道団体のための気候環境憲章」に署名し、それに基づいて、気候変動の緩和と適応に対する取り組みを実施しています。

国内においても自然災害は頻発しています。昨年も大雨被害や台風被害において、災害義援金の募集と共に、医療救護班の派遣や救援物資の配布を行いました。皆さまからのご寄付や赤十字ボランティアのお力なしにこれらの活動は成し得ませんでした。またCOVID-19の脅威は低下したとはいえまだ厳しい状況下、全国の赤十字病院や血液センター、社会福祉施設は人々のいのちと健康、尊厳ある生活を守るために力を尽くしました。

3年後の2027年、日本赤十字社は創立150周年を迎えます。社会や経済、世界情勢の大きく変化する中で、赤十字の理念を実現し、継続していくためには、赤十字のあり方を常に見直していくことが必要であり、現在、その取り組みの一つとして、来年4月からの大阪・関西万博への出展準備も進めています。

2024年も皆さまと共に、国内外の人道危機に対応し、世界中に赤十字運動の輪を広げていく年にしたいと考えておりますので、引き続き、どうぞよろしくお願い申し上げます。

日本赤十字社社長
清家 篤

そのとき、日赤はどう動く!?

国内災害救護 まるわかり辞典

日赤の救護活動についてさまざまな角度から紹介するコーナー。
今回は【自助・共助のチカラを育てる】です。

災害が起きたとき、自分や家族の命をいかに守るか。その備えとして身に付けていただきたいのが**「自助」「共助」「公助」**の考え方や知識です。自助は、自分自身や家族といった身近な存在の安全を守ること。共助は、近隣の人々をはじめ、手を差し伸べることができる範囲のコミュニティでの助け合い。公助は、市町村や消防・警察・自衛隊、そして国から指定を受けた日赤などの公的機関による対応のことです。

災害発生の直後は、道路の寸断などで外部からの迅速な支援ができないこともあるため、自助と共助の精神に基づいた行動が、命を救うことにつながります。例えば、地震のときに、家具が倒れる危険を回避するためには、普段から家具が倒れにくい対策をする自助が大事になり、また、避難生活を安心・安全なものにするためには周りの人々との共助が欠かせません。しかし、これらの考え方は、平穏な日常生活では、つい忘れてしまうことも…。そのため日赤は、年間を通じて**赤十字防災セミナー**を全国各地で開催。同セミナーの特徴は、体験して自ら考える、さまざまな参加型カリキュラムであること。地図に防災設備や危険な場所を書き込み、グループで情報を共有しながら、災害別の自宅や地域での被害を把握する**「災害図上訓練（DIG）」**、大規模地震の避難所生活をカードゲームで学び合う**「ひなんじょ たいけん」**など、身近なところから防災に取り組み、自助の力、そして地域で助け合う共助の力を育てるお手伝いをしています。

赤十字防災セミナーで参加者が「災害図上訓練（DIG）」に取り組む一場面。自分が住む地域の人々と情報を共有し、自助・共助の力を高めていくための取り組みです

1 TOPICS

青少年赤十字（JRC）の国際交流集会、5年ぶり開催

国を越えて未来を築く、仲間づくり

海外からはインドネシア、韓国、シンガポール、タイ、ネパール、ベトナム、香港、マレーシア、モンゴルが参加

令和5年度青少年赤十字国際交流集会*が、2023年11月23日～26日に東京・代々木で開催されました。この事業は、2年に一度、国際理解と親善を図るために国内外の青少年赤十字・赤新月社メンバーが集って行われるもの。コロナ禍を経て5年ぶりに海外メンバーが来日し、国内JRCメンバー39人、海外メンバー26人の計65人が交流を深めました。

今年のメインテーマは、**「持続可能な未来に向けた青少年赤十字活動」**。加えて、「平和教育」と「気候変動」という小テーマを設け、日本と海外の混合チームが言葉の壁を越えて協力し合い、フィールドワークやディスカッションに参加。その中で初の試みとなったのが**「サス学」**ワークショップです。「サス学」とは、サステナブルな未来を作るための探究型アクティブラーニングで、この企画は昨年350周年を迎えた三井グループが赤十字の活動に共感して実現しました。三井グループ8社が、「気候変動」・「平和教育」に資する事業活動を紹介した動画を制作し、「サス学」ワークショップではチームごとに動画を視聴しました。動画のテーマは、「消費者の応援でアフリカの未来を変える！」「森をまもる活動アイデアを考える」など多岐にわたり、メンバーは動画視聴後、赤十字語学奉仕団の補助を受けながら英語で意見を交わしました。参加者からは「インドネシアでは幼い子どもたちに災害クイズを出し、正解したらお菓子をあげるというふうに、**楽しく災害を学ぶ取り組み**をしていることを知りました。僕も近所の児童館で取り入れられると感じました」（京都府JRCメンバー）、「持続可能な“終わらない森”創りという取り組みに興味を持ちました。自国に帰ったら、**『日本にはこんな技術がある』とシェア**したいです」（インドネシアJRCメンバー）などの感想が聞かれました。

全日程を終えた国内メンバーからは、「海外のメンバーの中には救急法を教えている子もいて驚いた。同じ学生で教える立場だなんて…！」「日本ももっと**平和教育を取り入れるべき**だし、それを実現するには**赤十字の中立な立場が大事**だと思う」などの声が。海外から来た仲間との交流を通して視野が広がった参加者は、地元に戻って今よりさらに青少年赤十字活動を発展させていくことが期待されています。

フィールドワークでは、赤十字や日本文化への理解を深めるゲームなどでチームの絆を深めた

*開催には、三井グループ350周年記念事業の一環として日赤に寄付された活動資金が生かされました

献血ハートフルストーリー vol.1

このコーナーでは、血液事業に携わる日赤職員、ボランティアさん、献血協力者などの人たちが、日々どのような思いで血液事業に取り組んでいるのかを紹介していきます。

「人工赤血球」の研究開発は新たな治療法発見の糸口にも

今月のひと

profile
日本赤十字社
中央血液研究所
研究開発部 幹細胞担当
船戸（ふなと） 興自（こうじ）さん

日赤の中央血液研究所は、輸血用血液の安全性や品質の向上、検査手法の開発や改良などを目的に、研究を行っています。そこで私は、赤血球の研究に携わっています。実は、もうすでに技術的には人工的に赤血球を造ることはできます。しかし、現状では実験室レベルで一度に造ることができる赤血球の量は**“血液一滴”**程度。治療に必要な輸血量をまかなおうとしたら、今より技術が発展し、かつ巨大な製造用プラントが必要になるでしょう。それが実現するのは、ずっと先のことになりそうです。だから今は、輸血用血液を確保するために、皆さんの献血が必要なのです。

人間の体は約35兆個の細胞で構成され、そのうち約20兆個を赤血球が占めています。この赤血球には多くの謎が残されています。例えば、生物の細胞には核があるのが当たり前ですが、哺乳類の赤血球には核がない。途中で核が消失するのです。その理由が解明できていません。こういった研究は、**血液だけでなく、さまざまな疾患を解明していく糸口となる**と信じています。

研究所というと、人を救う現場とは縁遠く見えるかもしれませんが、研究所の同僚の思いに驚かされることがあります。コロナ禍に突入した数年前の年末、献血会場の人手が足りなくなり、研究所にまで協力要請が届きました。仕事納めの時期で帰省も決まっていたのに、ふだんの研究の仕事とはかけ離れた業務の手伝いに行く同僚たち。また、個人でも献血したり骨髄移植のドナーを経験したり、積極的に行動する者も。こういった仲間に囲まれて、**私も研究を通して、多くの人を救うことに貢献できたら**という思いになります。

At work

AREA NEWS

エリアニュース

全国各地、あなたの生活のすぐそばで
日本赤十字社の活動は行われています。

全国 皇后陛下から手拭いの御下賜 日赤の6施設に計600本

12月9日は日赤名誉総裁である皇后陛下のお誕生日です。この日、老人保健施設や特別養護老人ホームなど日赤の6施設に合わせて600本の日本手拭いが下賜されました。手拭いに描かれたモチーフは、皇后陛下がお選びになった「ゆず」のデザイン。手拭いを受け取った特養やすらぎの郷の入所者、堀由美子さんは「宝物が一つ増えました。明日から使わせていただきます」（写真左）、同じく湯川浩子さんも「皇后さまお誕生日おめでとうございます。これからもお元気で健やかにお過ごしください」と手拭いを手に、笑顔で記念撮影を行いました。

埼玉 教育評論家・尾木ママの講演も 奉仕団の創設75周年記念大会を開催

11月15日に開催された埼玉県赤十字奉仕団の記念大会に、ボランティア約230人が参加。開会式ではボランティアの代表者が「環境の変化に対応しながら、心を一つにして人道支援の輪を広げていきましょう」と挨拶。教育評論家・尾木直樹氏（尾木ママ）による講演では、今の子どもたちの抱える問題に赤十字ボランティアがどう関われるかについての講話があり、また、日本赤十字看護大学さいたま看護学部の成木弘子教授による「笑いと健康」をテーマとした講演では「笑いヨガ（ラフターヨガ）」も体験。情報交換と交流を深める機会となり、参加者からは、「時代にあった活動の姿を模索しつつ、これからも元気にボランティア活動を続けたい」といった感想が寄せられました。

千葉 日本AED財団とコラボ「AED1000台登録するまで帰れません!?」YouTubeライブに出演

11月4日、公益財団法人日本AED財団主催のイベント「AED1000台登録するまで帰れません!?」が、同財団公式YouTubeチャンネルで生配信され、日赤千葉県支部の職員が出演しました。

当日は、スマートフォンアプリ「救命サポーター team ASUKA」内の機能「AED N@VI」*を活用。千葉県内を散策し、新しく発見したAEDの登録や設置情報の更新を行うなど、県内のAED情報の充実に大きく貢献しました。実際に参加したメンバーからは、「楽しみながら社会貢献ができてよかった」「道中でおいしそうなご飯屋さんも見つけられて良いことづくしだった」といった感想が聞かれました。

＊身近にあるAEDの位置情報を地図上に投稿して確認しながら、広く共有することができるアプリ

静岡 大道芸ワールドカップ in 静岡 救護ブース運営で支援

提供：大道芸ワールドカップ実行委員会

11月2日～5日に開催された「大道芸ワールドカップ in 静岡2023」。静岡県赤十字奉仕団が毎年協力しているこのイベントに、今年も安全奉仕団と看護奉仕団、計41人が参加しました。奉仕団員たちは、会場内の巡回のほか、会場3カ所に設置された救護ブースを分担して運営。ブースに訪れた体調不良者やケガ人の応急処置に加えて、緊急度が高い傷病者の救急搬送の手配も行いました。コロナ禍前と同じ規模に戻っての開催に、参加メンバーからは「実際の活動でいろんな場面を経験し、また多くの方々と交流することができた」との声が聞かれ、成果を得た様子でした。

愛媛 ヒートショックを防げ！ 学生ボランティアと共に予防啓発運動

急激な温度変化によって心筋梗塞や脳卒中などを引き起こす「ヒートショック」。冬季に多発するこの疾患の予防を呼びかけるため、日赤愛媛県支部は松山市・大街道商店街で啓発運動を実施しました。当日は大学生の赤十字ボランティアと共に、歩行者にチラシを配布し、高齢者にはヒートショックの起こる原因や予防法について説明。話に耳を傾けてくれた方からは、「言葉は聞いたことがあるが、予防については考えたことがなかった。自宅で試してみようと思う」などの声が。愛媛県は全国的に見て心不全の死亡率が男女共に高く、近年の課題となっています。愛媛県支部は今後も命と健康を守る活動に取り組んでいきます。

愛媛 愛知 岐阜 新型インフルエンザや大地震・大雨災害に備えて 各地で大規模訓練開催

愛媛県松山市（❶）において、11月11日に「中国・四国ブロック各県支部合同災害救護訓練」が行われました。伊予断層を震源とするマグニチュード7.1の地震を想定し、愛媛県が中四国内で最も大きい被害を受けライフラインも停止した設定で、松山市赤十字奉仕団による炊き出し訓練のほか、赤十字防災ボランティアによる救援物資の供給なども実施しました。

一方、11月17日、18日には、日赤愛知県支部（❷）主催で中部・北陸地方8県の赤十字施設による「第3ブロック合同災害救護訓練」が開催されました。2000年に発生した、都市型水害として災害史に残る東海豪雨級の大雨災害が愛知県内で発生した場合を想定。実際に各県支部の施設から救護班や支援要員が集結し、他病院のDMATチームや豊田市などの関係団体の協力も得て、多くの組織が協働する訓練となりました。

また、岐阜県支部（❸）では、11月27日に実施された「新型インフルエンザ等対策連携訓練」に高山赤十字病院が参加。飛騨圏域3市の病院・消防関係者が連携し、新型インフルエンザに感染した疑いのある男性2人が受診したとの想定で行われました。職員は防護服を着用し、患者役の男性に症状や感染経路などの確認をしたほか、保健所と連携し、感染者を安全に移送する装置「アイソポッド」に入れ、飛騨圏域唯一の感染症指定医療機関・久美愛厚生病院に移送するまでの一連の流れを確認しました。

佐賀 佐野常民生誕200年記念 九州八県赤十字大会を開催 銅像のお披露目も

11月16日、博愛社（現・日本赤十字社）を創設した佐野常民の生誕200年を記念して、令和5年度九州八県赤十字大会が開催されました。「博愛のこころを未来へ」をテーマに、小学生から高校生までの学生で構成された「キッズミュージカルTOSU」による“博愛”をテーマにした公演など、未来を担う子どもたちが多く登場。九州の日赤8県支部が共同制作したオープニング動画では、参会者約1200人に向け、日頃の支援に対する感謝の気持ちと、“未来を共に創るメッセージ”を伝えました。

また、その前日には、佐賀県赤十字血液センター前に佐賀県が設置した佐野常民銅像がお披露目。佐野家現当主・佐野常具氏をはじめ、日赤の清家篤社長など、赤十字関係者が駆けつけ、銅像の完成を祝いました。

天皇皇后両陛下から御下賜金

12月20日、天皇皇后両陛下から、日本赤十字社の事業奨励のために金一封を賜りました。
この御下賜金は、災害等による被災者救援事業のための資金として使用されます。

常任理事会開催報告

令和5年12月22日、令和5年度第8回の常任理事会が開催されました。
今回の常任理事会では、会員増強に向けた取り組み、地域医療構想における個別案件について報告しました。

〈⑥ 1月号読者アンケート 質問項目〉

【A】日赤の「会員」ですか
ア. 会員（年間2千円以上の寄付を継続している。但し、義援金を除く）
イ. 会員ではない

【B】赤十字について知っている活動はどれですか
※下記選択から**ア～ケ**の文字をご記載ください。複数選択可
ア. 国内災害救護 **イ.** 国際活動 **ウ.** 赤十字病院
エ. 看護師等の教育 **オ.** 献血（血液事業）
カ. 救急法等の講習 **キ.** 青少年赤十字
ク. 赤十字ボランティア **ケ.** 社会福祉

【C】今月号の赤十字NEWSをお読みになって、以前よりも赤十字活動全体についての理解が深まりましたか
ア. とても理解が深まった **イ.** ある程度理解が深まった
ウ. すこし理解が深まった **エ.** 以前と変わらない

【D】赤十字NEWSの適切な大きさは
ア. 今のまま **イ.** A4サイズ
ウ. 小冊子（A5 148×210㎜）サイズ

【E】赤十字NEWSの発行回数は何回がよいですか
ア. 月に1回 **イ.** 2カ月に1回 **ウ.** 3カ月に1回
エ. 半年に1回

【F】赤十字NEWSの記事をスマートフォンやパソコン（オンライン）で読みたいですか、いままでどおり紙で読みたいですか
ア. オンライン **イ.** どちらかというとオンライン
ウ. （オンラインと紙の）両方 **エ.** 紙 **オ.** どちらかというと紙

【G】その他、赤十字NEWSに関するご意見、ご要望（任意）

Present!! 「稲庭うどんキッチンカー」を豪雨被災地や福祉施設へ派遣

パートナー企業 稲庭手延乾麺 八代目 佐藤養助

茹でたてを提供できる茹で釜が搭載された「稲庭うどんキッチンカー」

1860年に創業した、秋田県の稲庭うどんの老舗「佐藤養助商店」。長い歴史の中で伝統の技法を受け継いだ味、つるりとした食感が多くの人に愛されています。同社では、日赤の事業や理念に共感し、活動資金への寄付を続けると共に、食に携わる企業としてキッチンカーを使った支援活動にも力を入れています。このキッチンカー事業は社会貢献・地域貢献活動を通して、稲庭うどんのおいしさとお客様への感謝の気持ちを伝えることを目的に始まりました。2023年7月の秋田県での豪雨災害では、秋田市役所前にキッチンカーを派遣し、被災者らに250食を無料で振る舞いました。また、福祉施設への慰問活動や、県内の支援学校でうどんづくりの体験教室を行うなど、郷土食への理解を深めてもらいながら、地域と人々を支える活動を続けています。

3名様 紙化粧箱入り 稲庭干温飩 つゆ詰合せ（5人前）

プレゼント希望者は、以下の項目を明記のうえ、郵送・WEBでご応募ください。
①お名前 ②郵便番号・ご住所 ③電話番号 ④年齢 ⑤赤十字NEWS1月号を手にされた場所（例／献血ルーム） ⑥1月号読者アンケートの回答（質問項目は右上の赤枠内）
※ご応募いただいた個人情報はプレゼントの発送および弊社からのお知らせのみに利用いたします

郵送／〒105-8521東京都港区芝大門1-1-3
日本赤十字社 広報室 赤十字NEWS1月号プレゼント係
WEB応募／右の2次元コードからご応募ください。
1月31日（水）必着 ※当選者の発表はプレゼントの発送をもって代えさせていただきます

ご応募はこちらから

WORLD NEWS

―ワールドニュース―

イスラエルとガザ地区ってどんなところ？

イスラエルは地理的・歴史的な背景から、政治や民族における課題を抱えてきた。一方、ガザ地区は、1948年の中東戦争で住居や生計を失ったパレスチナ人難民など、人口約200万人のうち7割が難民で、その多くが貧困ライン（1日1.9ドル以下）で暮らしていた。このイスラエルとガザ地区では武力衝突が繰り返されてきた。

イスラエル・ガザ人道危機 国際人道法と「命の重さ」

「命の重さは同じはずなのに」――。紛争激化前にガザの病院に技術指導のために派遣されていた日赤の看護師が帰国し、ガザ現地の医療従事者の言葉を伝え、日本の人々に向けて「悲劇の傍観者であってはならない」と訴えました。今回は、人道危機の渦中で展開する赤十字の活動と、紛争下であっても守るべきルール「国際人道法」についてお知らせします。

紛争地で人道支援を届けるための世界的ルール「国際人道法」

多くの一般市民が巻き込まれているイスラエル・ガザ間の武力衝突。その中でパレスチナ赤新月社（以下、パレスチナ赤）とイスラエル・ダビデの赤盾社（イスラエルの赤十字社）のスタッフやボランティアは負傷者の救急搬送や救命活動、避難民の支援に奮闘しています。

11月下旬には、ガザ北部のパレスチナ保健省が管轄するアルシーファ病院において、水や燃料、医療資材などの物資が不足し、命の危機にさらされる乳児31人に対して、パレスチナ赤が、WHO（世界保健機関）やOCHA（国連人道問題調整事務所）と協力して救急搬送を実施。特に治療を必要とする28人の乳児をエジプトに、残りの3人は健康状態を確認してガザ内の病院に搬送しました。パレスチナ赤は、ガザ地区に39台の救急車を所有していましたが、攻撃などの影響で多くの車両が使用できなくなり、現在稼働しているのは16台。しかし、燃料不足でその16台の運用も困難な状況が続いています。これらの紛争地域における市民や負傷兵の命の保護、それを支えるインフラ機能の維持は、「国際人道法」の観点からも遵守されるべきものです。

国際人道法とは、主に武力紛争において、負傷や病気になった兵士、捕虜、武器を持たない一般市民への扱いを定めた国際法ですが、実際に国際人道法という名称の条約があるわけではありません。これは、1864年に結ばれた最初のジュネーブ条約に始まり、第二次世界大戦以降も度々見直されてきた国際的な人道的条約と慣習法の総称です。**国際人道法は、戦闘に無関係な民間人や傷病者、また赤十字・赤新月マークを掲げた医療従事者や人道支援活動などへの攻撃を禁じるもの**で、紛争下であっても人々の命と尊厳を守るためのルールを定めています。これらのルールは、赤十字の人道精神に由来し、今日では世界中の国で共有され、赤十字のさまざまな支援活動が可能になっています。

同じ重さの命を守るためにできること

今回のイスラエル・ガザ人道危機においては、赤十字の中立な立場を生かすことで、人道的な支援活動に結びつくケースもありました。赤十字国際委員会（以下、ICRC）は、各地域で拘束されていた人質の解放・被拘束者の釈放へ向け、すべての当事者に中立的な立場で関わり、日本時間の11月27日までに3回にわたって、ガザから人質計58人、ヨルダン川西岸からパレスチナ人計85人を、当局へ引き渡す役割を担いました。その後も、ICRCは人質の即時解放と面会を紛争当事者へ一貫して伝えながら、当事者に影響力を行使できる人々とも対話を続けています。

また、日赤からガザへ7月から派遣され、10月の武力衝突以降の状況も目の当たりにした大阪赤十字病院の看護師・川瀬佐知子さんは帰国後の報告記者会見で次のように語りました。

「現地の医師や看護師たちは住居や病院も砲撃され、避難しなければならない状況でも、病院に留まり続けていました。24時間体制で診療していた外科医は、爆撃を受けて病院に運ばれてきた自分の子どもの死にも直面しました。それでもどんどん増える患者のために働き続ける、こんな辛いことがあるでしょうか。また、こんな極限状態の中で、どうしたら人道支援活動を継続できるか、必死になって模索し、活動を行うICRCのメンバーの姿もありました。一緒に働いていた現地の看護師の『命の重さは同じはずなのに、自分たちに人権なんてない。世界中が自分たちを攻撃している。本当に惨めで不幸だ』という言葉が今も心に残っています。この瞬間も負傷者、死者は増え続けています。**この歴史的な悲劇の傍観者にならず、人々の声を集めて国際社会を動かすよう、行動し続けなければいけない**と思っています」

赤十字は本当に助けを必要とする人々に人道支援を届けるため、紛争当事者を非難することなく、公平・中立な立場を堅持し、危機の現場で、そして世界で、国際人道法遵守への働きかけを続けていきます。

攻撃を受けた救急車 ©PRCS

支援物資を載せてラファ検問所を通るエジプト赤新月社のトラック ©ERC

拘束されていた方々が解放され、ICRCのバスで移送された ©ICRC

※今回の記事の内容は2023年12月18日時点のものです